

追悼

黒川先生との思い出

中田 潤

二〇一九年四月に黒川康先生が亡くなられた。新潟県にお生まれになった黒川先生は東京大学文学部西洋史学科、同大学院、ドイツ・ハイデルベルク大学で学ばれた後、信州大学、九州大学、東京女子大学そして立教大学で教鞭を執られていた。

それ以前にも研究会等で議論する機会があったが、私自身が本格的に黒川先生の指導を受けるようになったのは、博士後期課程の学生として立教大学に入学してからであった。当時の在京大学院のゼミは、他大学の院生に対しても広く門戸を開いており、私自身も立教大学のゼミの他に木村靖二先生が指導されていた東京大学のゼミに参加させて頂いていた。立教大学のゼミにも、立教大学の院生は当然として、上智大学、青山学院大学、東京都立大学、明治大学の院生が参加していた。

中央の目線から描かれる歴史において捨象されがちな地方からの目線の重要性を唱え、また御自身もそうした観点からバイエルン史を主として研究されていた先生の指導スタイルが特に印象に残っている。それは先生御自身が新潟の出身であり、また地方の大学で長らく教鞭を執られてきたことも大きく影響していたようであった。そうした先生の研究スタイルに当時漠然としたものながら共感を抱いていたが、それは私自身地方出身者であったということが関係していたのかもしれない。

とは言うものの本音を言えば、先行研究に対する批判的な視点の養い方、史料の読み方などを毎回厳しく指導する先生のゼミの時間は、私にとって劣等感に苛まれ続ける時間でもあった。ゼミの終了後、いつも落ち込みながらトボトボと池袋駅に向かっていった自分が今でも思い出される。今になって考えてみると、出来の悪い教え子をドイツに留学させるといふ所まで引き上げなければならぬという使命感から来た、先生なりの必死の指導だったのであろう。おかげでその出来の悪い弟子は、めでたくドイツ留学を実現した。

私の留学中の一九九六年に黒川先生御自身がサバティカルを取得されて、ドイツで研究に従事される機会があった。早速先生からミュンヘンに出頭せよとの連絡を受けた。私

の留学先であるドイツの北の端のハンブルクから南の端のミュンヘンまで自腹で移動することは、貧乏学生としては厳しかったし、また先生から不勉強さを咎められると思うと、正直気が重いものがあつた。そうは言っても逃げ出す訳にもいかず、当時進めていた博士論文の進捗状況その他の情報を整理し、十分に「理論武装」した上でミュンヘンの指定されたビアホールに向かつた。

そこで久しぶりに再会した黒川先生の私への接し方は、もはやかつての鬼軍曹ではなく、孫が可愛くて仕様が無い祖父のようであつた。二人で大いに飲食した食事代を全て先生が負担しただけでなく、帰り際に小遣いまで渡され困惑したことを覚えている。その時先生が熱く語られていたのは、ドイツ史研究の水準をグローバルなレベルで見渡した時、その最先端はドイツ本国である。それに続くのはイギリスとアメリカ合衆国であろう。そして今やイギリスやアメリカの水準に追いつきつつあるのが日本であり、とりわけ若手の研究者たちはそうした心構えで研究に取り組んで貰わなくては困る、といった内容であつた。先生の自負心の強さに圧倒されながらも、そうした日本の西洋史研究をとりまく当時の雰囲気は何となく自分でも共有していたことを記憶している。

しかしながらハンブルクで博士論文を提出し、ドイツか

ら戻つた私を待ち受けていたのは、バブル経済が崩壊し、新自由主義的風潮が席卷する日本であつた。大学に限つていえば、それは国立大学の法人化、文教予算の全般的な削減、そしてとりわけ人文科学系の講座の縮小という現象として表れていた。我が国の歴史学研究の「地力」が浸食され、研究者の共同体からの発信力そのものが失われつつあるように見えるこうした事態の展開について、ある同僚に意見を求めてみたことがあつた。御本人の本心ではないと推察するが「自分として研究したいテーマを研究するだけです」という答えが返つてきた。大学でのポスト自体が激減し、絨毯爆撃的に研究の隙間を埋めていくような研究スタイルはもはや人材の量の面でも、研究資金の面でも不可能であるという現状を前にして「もはや開き直るしかないでしょう」と言っているように私には聞こえた。こうした歴史学会の現状を黒川先生はいかに見ておられるのだろうか。心からご冥福をお祈りしたい。

(茨城大学人文社会科学部教授)